

庫にある内に、あの大地震で灰燼に帰して了つた。その事を仏国のポオル・ルクリュに知らせてやるとポオルの答へはかうだ。「あの噴火山の讚美者エリゼの図書が地震の為に虚無に帰したなんて、此の上もない結末ではないか！」

無限な世界にあつて、人の一生は電光石火の如きものだ、と言ひ、「新しい氷河時代が英国やスカンデナヴィキヤを再び氷のマントを以て被ひ、吾等の美術館や図書館がその大霜枯の為に破壊される時、現在の人類は如何になり行くであらうか？」と言つたルクリュの為には百年祭なんて全く無意味だ。

社会革命史上に於けるルクリュの業績

▽ 生活史略記

第十九世紀の世界が生んだ最大人物の一人であるエリゼ・ルクリュ (Elisée Reclus) は、無政府主義の大先達として、社会地理学に於ける古今独歩の碩学として、世界の自由思想家の崇敬愛慕を一身に集めた人である。その活動は余りに多方面である。先づ生活の年譜から始めよう。ジャック・エリゼ・ルクリュは一八三〇年三月十五日ポルドー附近のサント・フォア・ラ・グランドに生れた。

一八四八年に欧洲革命が勃発した時、彼はまだ十八歳の青年であつたが、既にブルードンの無政府思想を懐抱し、兄のエリイと共に激越な言動があつたといふ理由で、モントーバン神学校から追放された。一八五一年のナポレオン三世のクーデタに際しては、西仏ピレネーに近いところで兄とともに叛逆を企て、失敗して危く逮捕を脱がれて英国に亡命し、更に米国に渡航し、刻苦辛酸を

具さに嘗めて中・南米にユトピア建設の地を求めた。一八五七年故国に大赦令が発せられたことを聞いて、惶惶として帰国し、多くの地理学的、社会学的論文を発表して世の注目を惹いた。彼は当時世界的に有名であった『両世界評論』に米国黒奴制度の惨状とその非人道的事実とを曝露し非難した長論文を発表して、大いに世論を喚起し、殊に米国青年に甚大な影響を与へ、大統領リンカーンをして報償を申出でしむるに至つた。(しかし彼は單純に之を謝絶した) 一八六四年に最初のインタナショナルに加盟し、一八六八年には「平和と自由の聯盟」大会にバクニンとともに無政府主義演説を試み、多数派と意見が合はないでバクニン等とともに同聯盟を脱退するに至つた。

一八七一年に有名なバリ・コムニンが勃発した時、彼は兄のエリイ、弟のポールと三人にてこれに加盟し、銃を執つて出陣し、軍法會議にては危うく銃殺を免れて無期徒刑に処せられ、諸国学者達の連署抗議となり、遂に減刑されて瑞西に追放された。爾來、無政府主義者の思想的啓発に努めると同時に『世界新地理学』の大作に心血を注ぐ事になつた。各冊一千頁に近い大冊を毎年一冊づゝ、十九ケ年に十九冊を脱稿し、世界の学界をして驚嘆せしめた。一八九二年、ベルギー・ブリュッセル市の自由大学に地理学講座を受持つべく招聘せられたが、折りから一青年アナキストがパリの国会議事堂に爆弾を投じた事件があり、それがエリゼの甥のポール・ルクリュの指導下に行はれたといふ評判になり、遂にエリゼまでブリュッセル市ブルジョアの嫌忌するところとなり、彼は地理学講座を辞せざるを得なくなつた。

併し進歩的な教授連や学生連は憤激し、エリゼは独立して連続講演を公開するに至つた。それが自然發生的に新大学の創立となり、極めて國際的な色彩を帯びた自由思想運動の一大本營となつたのは当然である。

爾來一九〇五年四月十五日に、その大生涯を終るまで、彼は殆どブリュッセル市を定住の所とした。

▽ 彼の両親

以上、私はエリゼ・ルクリュの重要な生活記録の概略を年代的に叙述した。これによつて、彼の大體の姿は読者の前に素描せられたと思ふ。これより少しく、彼の生涯に遭遇せる世界の波瀾と、これに應ずる彼の活動とに就いて、節を重ねて検討を試みよう。先づ彼の両親から始めなければならない。

エリゼ・ルクリュは男女合せて十人の兄弟を持つてゐた。この大家族を産んだ両親は、フランスのやうにカトリック教国には珍らしいカルヴィニストで、極めて嚴肅な信仰の持主であつた。父の家柄は伯爵家に属し、最初はドカーズ公の秘書を勤め、母はルイ十八世の有名な大臣の一族であつたので、父がもし欲するなら高貴な官途への登竜門が彼の前に開かれてあつた。然るに彼は自ら新教の牧師たらんことを望み、真にキリストの使徒たるべき者は、たとへ「枕すべき一個の石を持たなくとも」神の道に専心せねばならぬ、と考へるに至つた。

そして親戚や友人達の諫止をも振り切つて、無一物でピレネー山麓の新教徒団体の中に飛び込ん

だ。それはエリゼが二歳の時であつた。この牧師の孫であり、エリゼの甥であるポール・ルクリュは、この祖父に就いて次の如く言つてゐる。

「毎日の行動から見れば、ルクリュ達の父は實際上の共産主義者であつた。

一八三一年に国家公認の牧師たる職を辞拒したことから見れば、彼は芽生えの無政府主義者であつた。彼はその全人格を以て心の正しい人々に信仰を吹き込んだ。そしてその子供達は、各自の線に沿ふて、その平和な気分を弘通する天分を与へられた。クリスチャンでも、無神論者でも、かうした性質の人々は、法律も強権もない社会を可能ならしめる。云々」

かうした父親であるから子供の教育法も普通ではない。一八四〇年、やうやく十歳になつたばかりのエリゼを仏国西端からドイツのヌーヴイェドといふ所のモラヴィヤ教会に送つた。「神の御手に托して」たゞ一人で送られた小さなエリゼは、金銭の使ひ方も、ストラスブルから先きの地方の言葉も知らずに、その初旅を遂行したのであつた。

尤もそこには既に長男のエリイが送られてあり、愛弟の到着を鶴首して待つてゐた。このモラヴィヤ同胞教会は基督教の社会主義的精神を以て創立され、全然インタナショナルの組織を成してゐたので、父牧師はこれに幻想的信頼を寄せてゐたのである。エリイ、エリゼの兄弟はこのモラヴィヤ教会に一八四二年まで留學し、拙逸語の習得は殊に眼ざましかつた。

▽ 欧洲革命

一八四八年の欧洲革命が、当時二十歳前後の青年であつたエリイ、エリゼの兄弟を激動せしめたことは勿論であつた。彼等は当時仏南モントルバンの神学校に籍を置いたが、首都パリから齎らされた政治的闘争のニュースによつて、興奮に酔はされざるを得なかつた。

若き彼等が懐抱してゐた理想郷の実現、共和制建設のための闘争が、日に増し猛烈に展開されて来るのを知つて、彼等は教室に於ける月並の講義などには興味を感じなくなつた。革命勃発の報が彼等に達するや、彼等は忽ち雷火に打たれし如く、全心の興奮に襲はれ、酔へるが如く起ち上つた。現実の社会の生活は学校の教授よりは遙かに教訓的になつた。ルクリュ兄弟は一人の同志とともに、徒歩でセヴェンヌ山岳地帯を越えて地中海地方へと赴いた。かくて彼等の言説・行動は社会秩序を紊乱するものと認められて、遂に校長から停學処分を受くるに至つた。エリゼはこの当時から既に急進的な社会思想を懐いてゐたことが当時の手記中から発見される。

「われ／＼の叫びは、世界的共和制万歳といふことである。この未来の共和制に於ては、ギリシヤ人もフランス人と同様に権利を持ち、サモイェード人もパリ人と同一集會に於て談論するであらう。……各国に於けるわれ／＼の政治的目標は、貴族の特権の廃止と全地球上に於ける総ての人民

この重大な問題はあり、また久しく離れてゐた両親を見舞ひたさもあつて彼は一八五一年九月に帰国を思ひ立つた。そして当時ストラスブル大学にゐた兄と出會つて、共に手を携へてフランスの西端オルテの町まで徒歩旅行をした。当時ナポレオン三世派の王政運動に対する赤色の叛逆運動が起り、パリケードが築かれ、王党旗がそこに翻へされた。四十一ヶ月にわたる赤旗狩が北から南に、東から西へと遂行されたが、社会主義者は尚ほ行動を続けた。一八五一年十二月三日の払曉に武装蜂起を告示した労働団体委員中にも、同日築かれたパリケードの上にも、多くの社会主義者がゐた。その翌日、死者四百人、負傷者六百人が数えられたが、その中の多数は勿論社会主義者であつた。無造作な形式的裁判によつて、死刑に、流刑に、投獄に処せられたものが二万六千九百人に及び、かくて遂に帝制は樹立された。これがナポレオン三世のクーデタである。

の融合といふことである。……そこに於ては、各国民はもはや、政府にもせよ、他の機構にもせよ、如何なる監督をも必要としないであらう。それは政府なきことであり、秩序といふことの最高表現たるアナルシイである。……或る種の共産主義者は、現在の社会に対する反撥から、各人は集団内に没入せねばならぬ、そして暗礁上にうごめく珊瑚虫の無数の腕のやうになるか、または海中に滴落してやがて波浪となつて奔滔する水の雫のやうになるを要する、と考へるやうである。しかし、それは大へんな誤謬である。人間は孤立物ではなくて、自由な能動的な存在であり、而も同胞が互に混淆するのではなくて、自主的に結合するものである。」

▽ クーデタ

停学処分の結果、エリイはその研究を続けるために直ぐにストラスブルの大学に行くことに決し、エリゼはヌーヴィエドのモラヴィヤ教会に教授として赴任することになつた（一八五〇年）。彼は非常な歓迎をそこで受け、同胞達からも非常に愛されたのであるが、間もなく自分の勉強の熱望から、その少年達と別れを惜みつゝベルリンに赴いた。ベルリンにての彼の生活は、実に貧困を極めた苦学生のものであつた。

彼はベルリン大学に於て神学を勉強する予定であつた。それは殊に両親の希望するところであつた。しかし彼の心の中には些か新しい希望が光明を現はして来た。それは一面に於て、新社会出生の陣痛を悩んでゐたフランス思想界の動搖に動かされたものであり、他面に於て、彼の知識慾を最も強烈に牽引して新しい学問をこゝで発見したためである。それは即ち地理学であつた。殊に人文地理学であつた。当時ベルリン大学で地理学を講じてゐた学者は、即ちフムボルトの競争者であつた有名なカール・リツテルであつた。彼が非常な熱心と興奮とを以てリツテルの講座に列したことは勿論で、それに深い印象を与へられて、後に古今独歩とまで称せられる人文地理学者として彼の行路は既に開かれたのである。しかし彼が両親の熱望に背いて、牧師たることを断念するには可なり愛情的の悩みを感じたであらう。彼は幾度か故国の母親に手紙を送つて、牧師たることが却つて神をけがすことではないか、とまで論じてゐた。

エリイとエリゼの兄弟がこの警報に接したのは、彼等が久々で両親の元に帰った時であつた。ルクリユ兄弟は直ちに若干の友人と共に、叛逆の行動を開始し、王政反対の宣言を發し、市庁の占領を企てた。然るに力足らずしてそれは失敗に帰し、かへつて兩人とも流刑者名簿に記入されるに至つた。これを知つた彼等は、迅速に他国に亡命せざるを得なかつた。そして彼等が非常な困難を経て無事にイギリスに上陸することを得たのは、一八五二年一月一日であつた。

▽ 亡命

ルクリユ兄弟は英国で貧困を極めたが、兄のエリイは一家庭教師として、どうやら生活の道を發見し、エリゼはアイルランドの或る伯爵家領地の開墾を托されて大いに熱中した。しかしエリゼは間もなく、アメリカに渡航することになつた。それは広く世界を見たかつたこと、新天地に自由協同の理想郷の建設を試みたかつたこと、等が動機であつたらしい。

しかし元来無一物の彼は大西洋航海中は料理人となり、北米に上陸後はニューヨークの波止場人足となり苛重な労働に従事した。それからニュー・オルレアンに行き、更に中米のコロムビヤ(ニュー・グラナダ)に赴いた。一八五三年(二十三歳)に渡米して一八五七年に帰国するまでの彼の生活は終始緊張を以て貫かれた。ニュー・オルレアンでは或る富裕な家の家庭教師となり、非常な信頼を受けて様々な好提言に接したが、同家が黒奴を使役する様を見てこれを嫌忌し、一切の提言を謝絶した。

殊にその家の美しい少女の愛情に撥して彼自身も心を動かしたにも係はらず、奴隷保有者の娘と結ぶことは彼の良心が強烈に拒否するのであつた。彼はその為決然としてニュー・グラナダに赴いたのである。彼はこの時から、米国にてかく卑しめられる人種の娘と結婚しようといふ願望を懐くに至つた。

ニュー・グラナダでは様々な企画をたて、こゝに理想郷を造つて世界文化に貢献しようといふ意気こんだ。成立の見透しがつけば、直ちに兄夫妻をも呼びよせて、ともに楽しい自然生活を営まうといふ考へは、当時の彼の手紙に書かれてある。ところが、素より徒手空拳を以てする彼の事業はなか／＼容易なことではなかつた。況んや文化世界から遠く離れたこの未開拓地域に於ておやであつた。その時、彼の耳を襲つたニュースは故国に發せられた大赦令のことであつた。彼は取るものも取りあえず、惶惶として帰国の途に就いたのである。

▽ 北米奴隷解放に寄与

一八五七年に帰国した彼は間もなく黒人と白人との混血児クラリス・ブリアン嬢と結婚した。それは彼が在米当時以来の願望が成就された訳で、而もこのクラリス嬢が絶世の美人であり、賢妻であり、良母であつた事は、如何に彼を幸福ならしめたことか。それから一八七〇年までの彼の文筆活動と、研究、旅行、探險の活動とは実に超人的のものであつたが、更に彼はバクニン等と結んで大いに

自由協同運動のために驚異的影響を与へた。

アメリカから帰国するや否や、彼は『哲学評論』に「ヨーロッパの土地の歴史」を執筆して世の驚異の注目を引き、『コーペラシヨン(協同)』誌上に奴隷廃止論者ジョン・ブラウンの死刑事件を報じて読者に深刻な印象を与へ、一八六〇年には有名な『両世界評論』に四回にわたつて「合衆国に於ける奴隷制度」を論じて、大いに世論を喚起した。エリゼの甥のポール・ルクリュはこの文章に就て次の如く記してゐる。「あの文章は多大の反響を喚び起した。彼の血気にはやる憤激をぶちまけて、彼は奴隷制反対派のために傾倒したが、それは蓋しフランスの、否、寧ろ全世界の輿論の一部を醸成するに至つた。この言論攻撃は北米合衆国にも大きな反響を起したらしく、彼の遺したアルバムに五十枚ほどの米国志願兵(南北戦争、即ち奴隷解放戦争)の写真が見出される。それには各々その所属部隊の番号と姓名とが記入されており、はるく米国からパリの筆者(エリゼ)に送つたものらしい。ワシントンの政府もまた彼の論文に注目し、パリ駐在米国大使を通じてエリゼ・ルクリュに褒賞を申し出た。ところがこの若者は何ものをも受け容れないので大使は爾来ルクリュと厚い交友を結ぶに至つた。云々」彼の一本のペン先から迸ばしり出た彼の熱血が、新旧両世界を如何に激動せしめたか観察しられるであらう。

▽ 最初の無政府主義的演説

一八六二年、ロンドンの国際博覧会を機会に、英・仏両国労働者間に親交が結ばれ、一八六四年には両国労働者の合同にて最初のインタナシヨナル(国際労働者協会)が結成された。その年の内にパリにもその事務局が設置され、エリゼ・ルクリュも直ちにこれに加盟した。エリゼはその前年、ロンドンの博覧会を見物し、そこで仏国労働者が活躍せる様を見て非常に喜んだことが、彼の書籍に見出される。一八六八年九月六日から十三日にわたつて「国際労働者協会」第三回大会がベルギーのブリュッセル市に開かれ、同年同月二十一日から二十五日にかけて「平和と自由の聯盟」大会がスイスのベルンに開かれた(ギクトル・ユーゴーがその大会の議長に選ばれた)。そして前のインタナシヨナル大会に於て、「平和・自由・聯盟」は既にインタナシヨナルがある以上は存続理由を失つたこと、従てインタナシヨナルに加盟せんことを要請する、との決議が行はれた。

そこでこの問題が「平和・自由・聯盟」大会で論争され、同大会はルクリュや、バクニンやの革命的社会主义派とブルジョア、自由主義者との二派に分れ、ルクリュ、バクニン等は遂に同聯盟を脱退するに至つた。彼はこの大会の時の空気を兄のエリイに書き送つた中に次の如く言つてゐる。

「この紳士達(出席者達——石川)は『ブリュッセル』の労働者に対して頗る不満なのだ。彼等は憤りに満ちてパリからやつて来た。……バクニンや吾々はどうであつたか、吾々は言ふた。ブリュッセル大会の作為は、無作法であり、悪戯であるが、しかし、こんな無礼は気にかけない方が吾々の尊厳を保つ所以であり、寧ろ社会的公平を主張すべくブリュッセルの代表者よりも一段の強硬さと

団結とを示して以て、彼等の価値を全然喪失せしむべきであると。」

この大会で社会問題討議に際して、ブルードンの遺言実行者として有名だったシヨデー一派とバクニン一派とが対立した。バク派が提出せる「階級及び個人の平等化」の問題に対するシヨデーの演説をエリゼは評して「僕はこんな貧しい演説を曾て彼から聴いたことはなかつた……それは憐れむべき有様であつた。僕は彼のために気の毒でならなかつた」と言ふてゐる。そして「バクニンは非凡な強さを持つた教語を以てこれに答へ、彼及びその同僚に取つては、何よりも先づ原則が重であること、集合的所有権、相続の廃止等々の方法は研究問題として差し置くこと、を明白に説明した」と続けるのであつた。

大会四日目は聯合主義の問題が提案され、エリゼ・ルクリュはその提案理由の説明者になつた。彼はその状況を兄に報じて、

「全員がその原則には賛成であつた。たゞ僕としては、それを精確にしたいと思つた。僕は言明した、愛国狂の古い祖国や、封建的な県や、専制の機構たる郡や区や、極端な集権者の発明せる今のコムミュンや、を破壊した後に残るものは、たゞ個人のみであること、そしてその個人が思ふままに団結すべきことを。こゝに理想的の正義がある。故に僕は提議した、コムミュンや県の代りに生産の集団 (Association) とその集団の聯合とを。」

これは蓋し彼が公けにした無政府主義的演説の最初のものであつたらう。しかし彼の提議は賛成三十七票に対する反対七十七票で否決された。エリゼ・ルクリュやバクニン等と行動を共にした少数派は大会最後の日に聯盟脱退を宣言した。十八名の署名にて公表せられた宣言書には次の語句がある。

「平和と自由の聯盟の大会々員多数は、階級及び個人の経済的社会的平等化に反対であることを熾烈に明白に表示した。

そしてこの原則の実現を全然目標としない彼等のすべての政治的綱領と行動とは、社会民主主義者、換言すれば、平和と自由の良心的論理的の友の到底受諾し得ざるものであると考へ、次の署名者等は聯盟から脱退することを彼等の義務なりと信ずる。」

▽ パリ・コムミュンに銃を執て起つ

一八七〇年、仏独戦争に仏軍が敗れてパリが独軍の包囲するところとなり、ヴェルサイユに仮政府が樹立せられて、その首脳となるチエールとドイツのビスマルクとの間に媾和会議が開かれようとしてゐる時、パリ市民はヴェルサイユに対して叛逆した。その内乱は王政派と共和派と社会主義者との三つ巴の紛争で、その中で急進共和派と社会主義派とが協同して、護国軍が抛棄した武器を持つて

起ち、パリ市庁を占領してコムミュンの宣言を發した。

ヴェルサイユ政府の首長チエールはオルレアン党に属した人であり、やがてはオルレアン王制を復活させるのではないか、といふ疑惑が共和派の人々を刺激したのであらう、その憤激は白熱化したのである。これに対して大統領チエールとビスマークとは、血を以てこの革命を窒息せしむべく合意した。その包囲を突いて、パリの革命軍は出撃した。エリゼ・ルクリユは兄のエリイ、弟のポールと三人打連れて銃を執つてその軍に加はつた。

兄のエリイは手に負傷してゐたので銃をとり得ず戦友の背囊を荷つて隊におくれ、弟のポールは医者なので負傷者の看護に専心し、エリゼ独りシャヤヨン高地に於てヴェルサイユ軍の陥穽に会ふて捕虜になつた。そして軍法會議に於て無期徒刑の判決を受けた。

この闘争を目撃せる者の一記録中に次の記事がある。

「彼等（ヴェルサイユ軍）は、あの数日間の労苦によつて疲労せる、灼熱の太陽下の長途の徒歩に困憊せる不眠不休で衰弱の極に達せる、そして奮闘のために極端な襤褸になつた衣服を纏へる、あの不幸な者たちを、これ見よがしに群衆の前に徒步行列せしめて、地方首都（ヴェルサイユ）の街々に誇示するのであつた。人々は侮蔑を以てこれを迎へ、捕虜達の顔を穴のあくほど見つめて、これに馬鹿氣きつた嘲罵を浴せるのであつた。」

この捕虜の中にはエリゼ・ルクリユ、ルイズ・ミシエルあり、みなこのむごたらしい苛責を受けたのである。

一八七一年四月五日、エリゼは多くの同胞が銃殺されたサトリの營所に多くの同志とともに護送され、それから十五ヶ所の監獄を引きまはされた後にプレスト港附近のケレンンといふ地獄船に移された。こゝには七ヶ月余りしかゐなかつたが、彼は多くの囚徒が読むこと、書くことを知らないのを見て、直ぐにその教育に着手した。或る者には英語を教へさせた。ルクリユ一家はコムミュン叛乱の直後、エリゼの行方がわからないので、あらゆる手段を尽して尋ねたが手がかりがなかつた。ところが、これを聞いた米国大使は外交官たる特別地位により、一婦人をして彼の所在地を發見せしめた。エリゼの最初の地理学的大著『地』第二巻は、この獄中に於て校正せしめられることができた。

エリゼが無期徒刑の判決を受けたことを聞いて、兄のエリイは彼に書を送つて次のやうに言つた。

「わが愛する友よ、これは君の生涯にとつて重大な一時機だ。君はフランスの面前に於て、一人の男子だといふ証言を、軍法會議によつて与へられたのだ。君は銃殺の前に立ちて、牢獄の中に於て、また流刑に遭遇して、いつも断乎たる威厳を保ち、正直で、誠実で、義勇であつた。君は常に平静に、且つ思ふ存分に行動した。フランスの地獄幽囚七ヶ月を経ても、彼等は君を汚すことも貶すこともできなかつた。醜汚、陋劣な行動を以て穢されてゐる彼等の世界を睥睨して、君は常にこれに真正面から立ち向つた。而もなほ彼等は、君を些か痛めつけることはできたかも知れないが、

君を挫折せしめることはできなかった。君はたしかに良心そのものだ。本当に、私は君に対して不満を持たない。立派なエリゼ……結局、君は刑の宣告を受けた方が、吾々の道のために善かったのだ。……君は共和制とコムミュンとを守護した。……」

彼に対する無期刑の宣告が世に伝えられた時、世界文化史上に曾て見られない一事が現はれた。それは西欧諸国の有名な学者達が連署を以てフランス政府に抗議を提出したことである。その署名者中にはダーキンや、ウオレーヌを始め、カアペンター、キリアムソン、ロード・アンベリイ其他多くの世界的碩学があつた。その文中に「われわれは考へる、このやうな人物は、単にその生れた国のみならず、全世界に属するものであつて、かうした人物を沈黙の中に幽閉したり、文明の中心から遠く僻^{へま}陬^{さへ}の地に送つたりするならば、フランスは世界に与へる自分の正当な感化力を自ら殺滅するに外ならない」とある。かうした世界的協力を以てする良心の抗議に遇つては、さすがのフランス政府もこれに抗し得ず、遂に彼の刑を減じて十年間の追放といふことにした。かくて彼は自ら選んだスイス国の国境まで政府の護送車にて送られたのである。

▽ スイスに亡命

スイスに亡命してからの彼の主たる仕事は、その最大の事業たる『世界新地理学』の著作とバクニシ其の他の同志に対する物心両面の援助とであつた。彼が一八七五年に第一巻を世に送り、一八九二年に最後の第十九巻を脱稿した『世界新地理学』の出現は、まことに歴史上の一大事件であつたとは、ブリュッセル新大学の総理ド・グレフ博士の頌讚の言葉である。毎巻八九百頁から一千頁の大冊を十九冊も重ねた労大作は真に超人的の努力といふべきである。

クロポトキンの言に従へば、毎巻少くとも一千冊の書籍を引用したとのことで、それは文字通りの労作である。筆者は今日でも屢々地理的、歴史的疑問に遭遇するごとに、何時もこの書に回答を求め、その回答は実に現代の専門学者のそれよりは、極めて明確で且つ新鮮味に富んでゐるのに驚かされる。

こゝでルクリュ兄弟とバクニンやクロポトキンとの交友關係に就て少し書いて置く必要がある。バクニンがルクリュ兄弟と相識るに至つたのはバクニンがシベリヤを脱走して再び西欧に現はれた一八六二年直後の事であらうと思ふ。多分それは両方の親友であつたヘルツェンを介して交際が始まつたのであらうと言はれる。一八六七年頃には既に余ほど親しかつたと見えて、エリゼはバクニンをミンエルと呼んでゐる。

当時二種の国際的週刊新聞（それは『欧洲民主主義』と『欧洲合衆国』と）の発行計画があり、エリイ・ルクリュはバクニン等の推薦によつてそのフランス部の主幹に挙げられた。またバクニンを中心として「国際友愛会」といふ秘密結社が組織されてゐたが、ルクリュ兄弟もその一員であつた。

バクニンは或る婦人との論議に際して次の如く書いてゐる。

「夫人の最も親しい友人の友として、その友人達の中から、私はこゝにルクリュ兄弟を引用する。この二人の学者は、私の生涯に知った最も謙遜な、最も高雅な、最も無我な、最も純潔な、そして自分の主義に最も宗教的に献身した人々である。もしマツヂンが私のやうに彼等を知つたならば、人は全的に無神論者たることを表示しつゝも、なほ深く宗教的であり得るといふことを信じたであらう。それは責任の人の立派さである。彼等はその責任を最後まで果した。云々」

一八七四年にバクニンが社会運動から隠退して、その「思ひ出」を書いたり、思想の総合的解説を書いたりすべく決心した時、彼はエリゼにその書の発行を助けてくれるやうに頼んだ。エリゼは快諾の返事を送つた中に次の如き句がある。

「君の原稿の言語上の修正に関して、現在も将来も僕は絶対的に君に奉仕する。それは言ふまでもないことだ。僕は君の『思ひ出』と『わが思想の体制』とを鶴首して待つてゐる。勉強したまへ。……革命の洪水は大した災害を醸しませずに河床に復帰した。……僕は君に言ふ、フランスの現状について僕は不満ではない。……」

パリ・ロムニオン直前のエリゼは革命の到来を身近に感じて頗る興奮状態にあつたことが、当時の種々の手紙に於て看取されるが、このバクニンへの手紙では、その革命の洪水が去つて流れはもとの河床に復帰したと言つてゐる。

一八七五年四月十七日に彼がバクニンに送つた手紙には「久しいこの方、僕は進歩の宿命性といふものを信じなくなつた」といふ一句があり、彼の人生観までが変はつて来たことを物語つてゐる。

バクニンは一八七六年七月ベルンに逝去した。「思ひ出」も「思想の体制」も出来なかつたものと見える。無政府主義の大指導者クロボトキンが西欧に現はれたのも同年頃であつたが、彼はバクニンと相会する機会を得なかつた。クロボトキンは学生時代にも西欧に見学し、無政府主義運動の一発祥地ジュラを訪問したが、その時バクニンはロカルノにいたので会へなかつた。クロボトキンは一八七九年二月に再びスイスに来て、ジュネーヴで『叛逆者』といふ半月刊新聞の発行に参与し、そこでエリゼ・ルクリュと知り合ひになり、一八八〇年にはルクリュの住んでゐたクラレンスに転居して益々親交を結ぶに至つた。一八八三年のリオン裁判でクロラが五ヶ年の禁錮刑を受けた時、ルクリュは『叛逆者』に書いたクロの論文を編集して『二叛逆者の言葉』といふ本にして、自ら立派な序文を書いて出版した。

初めてクロの『パンの略取』が出版された時も、ルクリュはこれに序文を書いた。またクロの『一革命家の思ひ出』が出版された（ロンドンで）時にはルクリュは一書を送つて、「革命家」といふ文字は恐らく本屋の選んだ名称だらうが、君がこの本を書いた精神とはそぐわない。もしセンセイヨナルな文字が必要なら「アナキストの思ひ出」とすべきだ、と言つてゐる。ルクリュの人柄とその

友情とが察せられる。

ロシア革命の大先達アレクサンドル・ヘルツェンとルクリュ兄弟とは、ルクリュ兄弟が一八五二年にロンドンに亡命した時に識り合になつたのであらう。エリゼがアイランドから渡米した時に兄エリイに送つた手翰中に「好漢ヘルツェンに宜しく言つてくれ」といふ文句が発見される。それから十年の後にもヘルツェンの一族はパリ或はその附近のルクリュ家と頻繁に往復して親交を続けてゐた。ルクリュ兄弟は共和主義者或は無政府主義者として熱烈な献身者であつたが、同志を顕揚し助勢することに寧ろ多くの努力を注ぎ、自らは余り表面に立たなかつた。それは余りに精神的であり、無我的であるとして、若い同志から非難されたことさへあつた。

▽ 爆弾事件続発

スイスに亡命中、ルクリュはジュラ同盟の人々を助け、その中に成長しつゝあつた無政府主義運動の精神的思想的支柱となり、『労働者』『叛逆者』等の機関紙に執筆し、会合に出席して討議に参加し、そこで無政府共同思想を確立せしめるに至つた。一八九二年、ルクリュはベルギー、ブリュッセル市の自由大学に地理学教授として招聘せられたが、この時パリの国会議事堂に爆弾が投じられ、その実行者ヴァイヤン(三十二歳)は死刑に処せられ、当時同地のアナキスト運動の中心人物と見做されたポール・ルクリュ(エリゼの父)は欠席裁判で二十年の重懲役に処せられ、ポールの父、エリゼの兄

であるエリイ・ルクリュは逮捕せられた。この事件の勃発によつてブリュッセル市のブルジョアはエリゼの講座を嫌忌するに至つた。ルクリュの後を追ふて「自由大学」から押し出た進歩的教授の中には、有名な社会学者ド・グレンなどもいた。エリゼが広い講堂で溢れる大群衆を前に、その高遠博大な講演を開いたのは、その結果であつた。そしてその試みが端緒となつて自然発生的に成立したのが有名な新大学であつた。

さて、かうした爆弾事件が起つたのは何故であつたか？ それは数年来インタナショナルの労働者運動に対する政府の弾圧と、これに反撥するアナキストの闘争との絶えなかつた自然の結果であつた。数年以来、爆弾事件は屢々起つた。国会に於ては右翼の議員は社会党の責任を問ひ、社会党議員、殊にマルクス派社会党は自己を弁護すべく口を極めて無政府主義者を悪罵した。これに憤激し、議員の墮落を怒つた結果が青年ヴァイヤンの投弾となつて現はれたのである。その爆弾は強烈なものではなく、負傷者は少数であり、負傷は軽微であつた。数名の代議士(負傷者をも加へて)は大統領カルノに特赦の恩典を提議したが、カルノはこれに耳を貸さなかつた。その死刑執行の後、数日を経て有名なホテル・テルミニユスに爆弾が投ぜられた。投弾者エミール・アンリといふインテリ青年は極めて平静に「無政府主義万歳」を叫んでギロチンにかゝつた。この事件と同時に総検挙、総捕縛が行はれ、殆ど三千の家族が崩潰に帰せしめられた。

一八八九年六月二十五日、大統領カルノは博覧会開会式に臨むべくリオン市に行つたが、同夜九時頃、大劇場に入つた時、横腹に七首の一撃を受けて三時間の後に死去した。下手者はイタリーのアナ

キスト、カゼリオであつて、ヴァイヤンの死刑に対する復讐であつたのだ。

▽ 最後の大作・死去

かうした世の様に對してエリゼ・ルクリュは、その筆を以て答へた。それは一八九六年に出版された『進化・革命・及び無政府的理想』であつた。そして彼は、その生涯の最後の十年間に於て、健康状態不安の中でありながら、なほ無政府主義者として、また学者としての活動を些かも低減しなかつた。殊に彼の大作の生涯に金黄冠を着けるべく、否なむしろ最後の解説と結論とを付すべく、一大傑作を後世に遺した。『人間と大地』六冊三千五百頁がそれである。それが脱稿されたのは一九〇三年の末であつた。ところが、前きに『世界新地理学』の大出版で蔵を建てたアシエツト書店は、この書の出版を拒否した。それはこの書が無政府主義を結論とする故に引き受け難しといふにあつた。しかし遂に出版者が現はれて、一九〇五年四月十五日にその第一分冊が発行された。同時に露語訳とスペイン語訳とが公刊された。

スペイン語訳はバルセローナの近代学校の創立者として後に死刑になつたフランシスコ・フェレルであり、ロシア語訳者は今モスコウでクロボトキン図書館の主事をしてゐるレベデフであつた。同年七月四日エリゼ・ルクリュは数週間の病臥の後、その大往生を遂げた。彼の甥にして事業の後継者であつたポール・ルクリュが、彼の死をロンドンのクロボトキンに通知した手紙の中に次の言葉があ

「親愛なる友、今日といふ日が暮れないうちに、たとへ一言でも君に書を送りたい。……」

土曜日に、彼は弟のポオルと、妹のルイズの前で、自分の葬式には、誰も、たとへ弟妹でも従いて来てはならないと命じた。何故なら弟妹が若し従いて来れば、他の友達もみんなさうしたがるだらうから。ポオル（弟のポオルに非ず、甥のポオル即ち此手紙の筆者―訳者）が一人で俺を墓地につれて行つてくれ、と言つた。だから今朝の八時に、私は全く一人つきりで、吾等の友を埋葬しに行つた。

（ブ府イクセルの墓地）物見高い見物人は少なかつた。余りに早朝だつたから。そしてエリゼの希望は文字通り、彼が考へた通りに行はれた。

彼の最後の幸福の瞬間は、月曜日の、臨終の前に、ロシアからの電報を読んできかせて貰つたことであつた。（「クニヤス・ポテムキン」号の水兵の叛逆の報―訳者）彼が最後に仕上げた仕事は『人間と大地』のロシア語版のために序文を書いたことであつた。併し土曜日まで、彼は自分の著書のため、少しづつ注意事項を口述することが出来た。

友愛を以て ポオル・ルクリュ

エリゼには十人の兄弟があつた。兄のエリイに就ては今改めて言はない。エリゼは次男であつた。三男オネジムは地理を美文で書いた人として有名である。次にポールは外科医として仏国第一人者と

称せられた人、最後にアルマンといふ人がある。此の人は海軍士官であつて独りこの家族に不似合な百万長者になつた。この外に六人の妹があつたが、その人達は何れも皆博學多才の人々ばかりであつた。

以上は甚だ不十分ではあるが、巨人エリゼ・ルクリュの生涯を素描したものである。私は曾て歐洲に放浪すること前後十年に及んだが、それは右のポール・ルクリュ家を本拠とし、その家の子供として安らかに勉強することを得たお蔭であつた。

ブリュッセル市新大学内にあつたルクリュ図書館の全図書六万巻を、私は日本に持つて来たが、それは不幸にして大正十二年の大震災に際して、深川の倉庫に入れたまゝ烏有に帰して了つた。この災害をフランスのポール・ルクリュに報じた時、彼の返辞は「あの噴火山の讚美者エリゼの図書が地震のために虚無に歸したなんて、この上もない結末ではないか。」

バクニンを想ふ

一

バクニンがベルンに逝いたのは、丁度今から五十年前の七月一日である。

今から追想しても不思議な程、自由自在に回転した男、ビクトル・ユウゴオ等の平和協会に加盟したかと思へば、忽ち総破壊の宣伝をする。無定形主義 (Amorphism) かと思へば、自治聯合主義を説く。汎スラヴ主義を唱導した後、忽ち世界主義革命に転化する。まことに捕捉し難い人物であつた。けれども此の不思議な「断片的」な生活活動を綜合して見ると、そこには堰止め難い強烈な、一貫した感激の大潮流が滔々として奔流して居ることに気付かせられる。それこそ本当に不思議な奇蹟である。